

千里の鳥・万博の鳥(第96回)「ビンズイ」(2020年11月)

朝夕の冷え込みから木々の紅葉・黄葉への変化が目立つようになる頃、鳥の舞台には秋の主役から冬の主役へと役者交代があり、あちこちから冬鳥到来のニュースが聞こえてくる。今回紹介するビンズイは、日本の高山帯～シベリアの亜寒帯で繁殖子育てを終え、日本南部～東南アジアで越冬するが、万博公園に到着したばかりの冬鳥である。

ビンズイは体長15cmほど、上面が緑褐色に黒褐色の縦斑があり、下面は今月の写真で見られるように白色で脇は黄褐色味で黒褐色の縦斑がある。同属のタヒバリと姿がよく似ているが、ビンズイは明るい林で見られ、目の後に白い斑点があるのに対し、タヒバリは河川敷の開けた草原や田んぼにいて、目の後の斑点が無いことで見分けられる。

万博公園の芝生広場や水辺にいて虫探しているセグロセキレイ・ハクセキレイと同じセキレイ科の鳥であるとわかるのは、ビンズイは地上にいるときだけでなく、樹上にいるときも尾を良く振っているの、見て納得できる。ビンズイが松林で見ることが多いのは、冬の主食が松の種子(いわゆる松の実)であるためと思われる。ビンズイが地上にいて餌探しをしていた時、人が通ると樹上に逃げるが、太い木の枝にとまると、枝の上を歩き始めることがあり、他の鳥では見ることがないのでびっくりする。

長野県の高地の繁殖地は、カラマツ林やスキー場の草地だけでなく、ハクサンコザクラ・ミヤマキンバイの咲く高山帯の礫地・湿地など、いわゆる高山植物の花陰で子育てをしているとのことである★。大阪近郊で冬鳥として林にいるビンズイとは全く違う生活をしていることが分かり、他の冬鳥も繁殖地とは全き違う環境の万博公園に来ていることを思い出させる。

ビンズイの名前の由来は、さえずりを「ピンピンツツイ」と聞きなしたことによるとのこと、冬鳥として聞く地鳴きの「ズィー」からも連想できる。

万博公園では11月に入ってアトリがアキニレの実に集まり、ツグミ・シロハラ・アオジなどの冬鳥も次々到着し、一日一日鳥が増えている。万博公園探鳥会での観察記録では、春30種、夏20種、秋30種、冬40種と冬の種数が多く、個体数も夏の2倍以上になるので、一年中で最も鳥が多くなる。落葉樹の葉が落ちて鳥が見やすくなることから、バードウォッチングが楽しい季節が、3月ころまで続く。

コロナ禍で多数の人の集まる万博公園探鳥会はお休みにしている。三密を避けマスク着用で、お家の近くの「林や池のある公園」や「万博公園」で、ご自分で到着したばかりの冬鳥を見つけるバードウォッチングで、晩秋の日々を楽しまれてはいかがでしょうか。

**** 写真 ****

種名:ビンズイ

撮影日:2020年10月26日

場所:万博公園

撮影:有賀憲介

探鳥会は年内中止を継続

日本野鳥の会大阪支部の万博公園定例探鳥会、そして吹田野鳥の会はコロナ感染予防から、今年いっぱい12月まで探鳥会の中止を継続しているので、ご了解ください。

★参考資料

ピッキオ編著「鳥のおもしろ私生活」1997
主婦と生活社

